

医療が支える命、宗教が向きあういのち  
(平成 28 年 11 月 8 日 講師：沼口 諭 先生)

臨床宗教師という言葉聞いて、どういう仕事をイメージするでしょうか。医療で宗教とはどういうことなのか、今回大変興味深いお話を聞くことができました。

臨床宗教師とは、宗教をすすめることではありません。患者さんの話を聞くことが目的です。患者さんと一緒に、理想の死のイメージを探ります。また、患者さんがすがりたい物をつないであげる役割もあります。

死はすべてが終わることではありません。死の先には天国など、その先があるのです。そういう考え方をすることで、穏やかな死を迎えることができます。そして、今なぜ在宅医療なのでしょう。家族は延命治療をして長生きして欲しいと願う一方、本人はそうは思っていないケースが多いのです。そんな中、国民の 60%以上が、終末期の医療として希望する場所は在宅なのです。

在宅医療とは、死を取り戻し、向き合っていくこと。患者さんが中心となり、それを支える医療なのです。できることができなくなっていく死の不安、老いや病などで感じる生きる意味への問い。これは、誰にでも起こりうることであり、避けられないことです。そんなスピリチュアルペインを、ケアしていく必要性があります。苦悩をもつ患者さんに耳を傾け、苦しみを共有しながら孤独にさせないことなど、日常生活を「その人らしく」生きていくことができるよう援助していくケアが大切なのです。

命と向き合うこと。これは、亡くなっても終わりではありません。宗教者も含めた地域包括ケアによって、どこにいても患者さんやご家族が安心して過ごせる「いのち」のまちづくりをしていきたいと先生はお話されていまいした。死の壁を越えて生きる場所があります。命をどうやって支え、見つめ、どうケアしていくのかを考えることが大切です。沼口先生はこれからも臨床宗教師の活躍をサポートしていきたいとお話してくださいました。